



聴き、感じ、考え、表現する力を育てる

# 音楽科

渡辺 景子

# I 教科研究内容

## 1 音楽科における「自律」と「共栄」に向かう学び

「主体的・対話的で深い学び」の充実が求められている現在の教科教育において、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせることにより“教科を学ぶ本質的な意義”を外さずに指導することが大切である。音楽科における「見方・考え方」とは、「音楽に対する感性を働かせ、音や音楽を、音楽を形づくっている要素とその働きの視点で捉え、自己のイメージや感情、生活や社会、伝統や文化などと関連づけること」とある。音楽科における「自律」と「共栄」に向かう学びとは、この音楽科における「見方・考え方」を働かせ、表現する音楽に対する思いや意図をもち、聴き方・感じ方・表現の仕方を仲間と伝え合うことにより、試行錯誤しながら音楽的な価値観を広げたり深めたりすることであると考える、研究を進めてきた。

これまでの成果として、研究1年次は、生徒の表現に対する思いや意図を大切にし、音や音楽を通じたコミュニケーションや試行錯誤を十分にしながら学習を展開できた。その結果、思いや意図に近くような音楽表現が実現できたり、音楽的な価値観を広げたり深めたりすることを知として獲得し、自ら学ぶ意欲を生み出すような学びができたと考える。2年次は、生徒個人の学びの過程や学び方、学びの価値について、教師が見取るばかりではなく生徒自身が自覚しながら学習を進められていることが成果であった。特に、音や音楽によるコミュニケーションと言葉や文字によるコミュニケーションの関連を考えるためには、生徒個人の音楽思考と文字思考を捉えることが必要であり、音楽科における「見方・考え方」をどのように働かせるか、表現させるか、見取るかという点を考えながら授業を展開することができた。

このような成果が現れた姿として、卒業式式歌のパート練習（生徒会活動）で、進行役を務めている生徒Aとの会話を検討したい。この会話は、音楽科の授業に直接的に関わるものではないが、音楽の学習者の発言として、非常に興味深いものであると考える。

発言①「自分はちゃんと歌えるし、みんなの歌が何か変だというのはわかるけれど、どう変なのかが  
上手く説明できなくて本当に困った。」

発言②「Bくんのアドバイス\*とか、僕の通訳をしてみんなに言ってくれたCさんは、すごいなって思った」

※生徒B「ブレスの前の音がスタカートみたいになっていて雑に聞こえるから、最後の切り方を丁寧にしましょう。」の発言があった。

発言③「僕もBくんのように伝えられたらいいけど、『スタカートって何?』って思ってしまった。」

発言④「僕は記号の意味を覚えることも苦手だけど、それを知らないと、みんなにうまく伝えられないのかもしれないし、歌をよくできないかもしれない。」

発言①④の下線部から、生徒Aが目指す合唱の理想像をもっていること、発言①③の下線部から、それを言葉で伝えられないもどかしさや、的確に伝えられる生徒B・Cに憧れをもっていることがわかる。この姿は、「自己を拓き、協創する生徒」の姿につながるものと考えられる。また、発言②や活動の様子から、生徒BやCに歌唱表現に対する思いや意図を伝え、助けてもらいながらパート練習を進めている様子がある。この悩みや行動は、コミュニケーションを通して音楽思考と文字思考の相互関連を図ろうとしている姿と言える。さらに、生徒Bの「スタカート」という発言から、生徒Aは、楽譜を読むことや記号を理解することがよりよい歌唱表現につながっていくことに気づいている。このことは、「スタカート＝短く切る」が単なる暗記ものの知識ではなく、活性化された知識<sup>1</sup>になる可能性があることを示唆している。

上記のように、研究1・2年次の課題として、〔共通事項〕の理解や音や音楽を表す言葉、基礎的な表現の技能の習得が不十分な点があることがわかった。また、第1学年から第3学年まで、表現及び鑑賞の幅広い活動を、継続的に深まりをもって行うことにより、音楽科で育成を目指す資質・能力が徐々に育まれていくという学習の特性を考慮し、学習がどのように積み重なっていくのかを考える必要がある。

る。そこで、最終年次は、3年間の学びの連続性を意識した授業展開や題材構成に着目し、「自律」と「共栄」に向かう学びを展開することをねらい、研究を進めることとした。

## 2 音楽科における「自律」と「共栄」に向かう学びの手立てと期待される生徒の姿

前項で述べたように、学習の積み重なりや3年間の学びの連続性を考え、これまでに研究を進めてきた手立て(1)(2)については継続することとし、最終年次の手立てを以下のように設定した。

### 【最終年次の手立て】

学びの過程の記録、学びの振り返り、自己評価・他者評価の方法を工夫しながら、

- (1) 言葉や文字による思考や表現と、音や音楽による思考や表現の相互関連を図ること
- (2) 音や音楽によるコミュニケーションと、言葉や文字によるコミュニケーションの方法を工夫し、相互関連を図ること
- (3) 音楽科の他題材、他教科・他領域との相互関連を図ること

#### (1) 言葉や文字による思考や表現と、音や音楽による思考や表現の相互関連を図ること

1年次は、1題材1枚の「振り返りシート」を、授業の終末では本時の学習内容を振り返りながら次時の見通しをもつこと、次の授業の冒頭では前時の学びを思い出し本時の目標をもつことについて継続的・効果的に活用することができた。2年次は、思いや意図をもって表現した結果、音や音楽について知覚・感受し、鳴り響く音を通して思考・判断することを「省察」とし、これらを自分の新たな創意工夫へとつなげることを「自律」に向かう視点、(2)の手立てへとつなぐことを「共栄」に向かう視点と整理した。生徒の姿として、歌唱や器楽の授業においては、自身の表現を通してよかった点やなぜ思いや意図の通りに表現できなかったかを考え、新たな創意工夫へつなげることを、創作の授業においては、考えたことやイメージしたことを音や音楽で表現することと、創作したものを客観的に聴いて言葉で表現することを、鑑賞の授業においては、音や音楽から知覚・感受したことを言葉で示した後、必ず音や音楽に返すことを目指して実践を進める。

#### (2) 音や音楽によるコミュニケーションと、言葉や文字によるコミュニケーションの方法を工夫し、相互関連を図ること

これまでの研究においては、「作曲者」「鑑賞者」「演奏者」の3つの立場を意識しながら生徒個人が音や音楽と関わることで思考を深めたり、意見を交流しコミュニケーションを充実させたりすることに重点を置いていた。また、生徒個人の聴き方・感じ方・表現の仕方を更新したり自分を客観視したりすることが自己評価能力の高まりへつながるという考えのもと、ワークシート等の教具に改善を加えながら実践を行ってきた。

さらに集団や個の学びを深めるためには、コミュニケーションの方法だけではなく、そこで用いられている音や音楽、言葉、思考の過程に着目することが大切であると考えた。音や音楽と言葉や文字によるコミュニケーションやそこの思考を相互に関連させながら学びを進め、その過程を「省察」し、仲間と共に試行錯誤することを「共栄」に向かう視点、(1)の手立てへとつなぐことを「自律」に向かう視点とした。生徒の姿として、歌唱や器楽の授業においては、お互いの表現を評価し合い、自分の表現へ活かしたり合唱・合奏における集団の表現の高まりへ活かすことを、創作の授業においては、仲間と交流することで新たな創意工夫のアイディアを得たり、自分の作品に対する見方・考え方を広げたり深めたりすることを、鑑賞の授業においては、仲間の聴き方・感じ方を知るだけではなく、その視点から改めて聴くことで、お互いの聴き方・感じ方を広げることを目指して実践を進める。

全ての手立てにある「相互関連を図ること」とは、単純に学習内容の関連を示すということではなく、音楽科における「見方・考え方」あるいは他教科・他領域における「見方・考え方」を働かせながら、音や音楽を思考・判断・表現する過程において、生徒自身が意識的に学びをつなぐように、あるいは学びが深まるように教師が手立てを講じるということである。(3)の具体については、実践例を参照されたい。

## II 実践例

### 第1学年 主題の変化を捉えて鑑賞しよう 「B鑑賞」

教材：モーツァルト「きらきら星の主題による変奏曲」

#### 1 題材・教材の価値

| 時 | 学習活動   |
|---|--|
| 1 | 主題と6つの変奏(Var.1,3,5,6,8,12)の特徴を捉え、“モーツァルトへの表彰状”を作成する。 |
| 2 | 表彰状の紹介を通して、曲想と音楽の構造との関わりを理解する。                       |
| 3 | 「きらきら星の主題による変奏曲」の演奏を通して聴き、鑑賞文を作成する。                  |

本題材は、1学年で取り上げた音楽を形づくっている要素〔共通事項〕を手掛かりとし、これまでの学習を通して身につけた「見方・考え方」を活かして主題の変化を捉え、曲想と音楽の構造との関わりを理解しながら鑑賞したものである。教材には、「きらきら星の主題による変奏曲」を用いた。主題となる旋律がなじみ深いものであり、変化を捉えたりイメージを広げたりしやすいことに加え、主題の旋律を装飾していく形がとられているため、各変奏を聴きながらテーマを思い浮かべることが可能である。

#### 2 「自律」と「共栄」に向かう学びの手立て

##### (1) 言葉や文字による思考や表現と、音や音楽による思考や表現の相互関連を図ること

- ①創作で体験した「作曲者」としての思考で音楽を読み解くこと
- ②音や音楽、楽譜に根拠を求めながら言葉で表現して学習を進めること
- ③1・2時間目の学習では「演奏者」の視点を用いないこと

題材を通して最も意識した点は、先に行った創作「音の高さとリズムを変化させて旋律をつくろう」での学習<sup>2</sup>をいかに活かすかという点である。創作の学習では、音程を一つ変える、音符を細かく分割するといった工夫だけでも異なる雰囲気音楽が生まれることを体験した。創作の学習における「作曲者」の「見方・考え方」を鑑賞に活かすきっかけとして、形＝表彰状の作成と、教具＝タブレット型端末の活用を行った。その結果、楽譜に根拠を求めながら、自分の経験に引きつけて聴き、自分の聴き方・感じ方を言葉で表現する姿が現れると考えた。また、第3時には演奏者の解釈を通じた演奏に触れることで、新たな聴き方・感じ方・表現の仕方に出会う姿が期待されると考えた。

##### (2) 音や音楽によるコミュニケーションと、言葉や文字によるコミュニケーションの方法を工夫し、相互関連を図ること

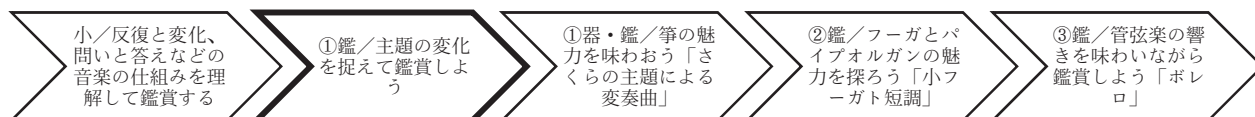
- ①音楽を形作っている要素を確認する場面の設定
- ②作成した表彰状の交流の場面の設定

題材の導入では、創作の授業と同様に全員で同じ画面を見て、自由な聴き方・感じ方を交流する中で、音楽を形づくっている要素について楽曲を分析する視点として整理した。ジグソー法を用いて、6人グループでA～Fの6つの変奏をそれぞれが担当し、第1時では同じ変奏の担当で活動、第2時ではグループに持ち帰っての活動を行った。第1時の学習では、同じ変奏でも異なる視点からの分析や聴き方・感じ方があることに気付かせることをねらった。第2時の学習では、表彰状を紹介し合い改めて6つの変奏を聴くことで、〔共通事項〕の言葉を用いて根拠を示しながら自分なりの聴き方・感じ方を伝え合い、お互いの聴き方・感じ方を広げる姿が見られると考えた。

##### (3) 音楽科の他題材、他教科・他領域との相互関連を図ること

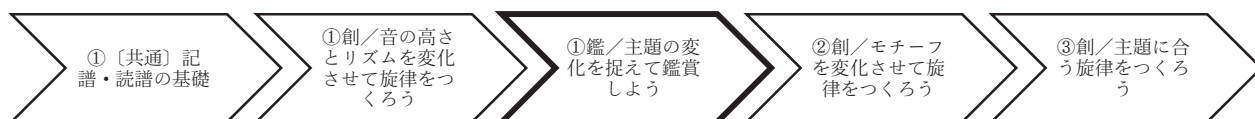
創作との関連は(1)で示した通りである。ここでは、さらに2つの視点から音楽科の「見方・考え方」のつながりを意識して題材を構成し、学習の深まりをねらったものを示す。

●音楽の仕組みを捉えて鑑賞する学習



音楽の仕組みに着目して聴くことの基礎を養うため、音高・リズムを切り口としながら、強弱・調・速度・拍子等の事項を扱い、それらのどのような働き（変化）がどのようなイメージや感情をもたらすのかという点について学習を行った。今後の学習では、本題材の学習での聴き方を想起させながら、新たに着目させる音楽を形づくっている要素（「さくら変奏」では奏法・音色・間、「ボレロ」では構成やオーケストレーション等）に気付いていくような仕掛けが必要である。

●同じ教具（タブレット型端末）を用いた学習



音楽の特徴を捉えるのに、楽譜に根拠を求めることは重要であると考えが、「自分は楽譜が読めない」と考えている生徒は非常に多い。タブレット型端末は、創作の授業において記譜力・読譜力・演奏技能不足を補う教具である<sup>3</sup>ことをふまえ、鑑賞の授業においても読譜の助けになるのではないかと考えた。また、タブレット型端末を用いた授業での思考が活かせ、新たな聴き方や感じ方が生まれるのではないかと考えた。

3 授業の実際と生徒の姿

●表彰状から

表彰状の形を創作の授業とそろえたことで、「作曲者」の思考で楽譜を読み解くことが容易であった。創作の授業では、「おもしろい」「なめらか」「変化が急激」など自分なりの聴き方で仲間の作品を評価し、表彰するという活動であったため、図1のような表彰状を用いた。本題材では、楽譜や音に根拠をもとめ、そこから感じたことを“賞”にする必要があったため、「どのように変化」したかと「どのような感じ」がしたかを分けて記述することとした（図2）。楽譜に記されている事実と、自分自身の自由な聴き方・感じ方を分けて記載することで、第1時ではそれらを整理することができ、第2時では音や音楽の事実を確認し、互いの聴き方・感じ方を十分に交流することができた。

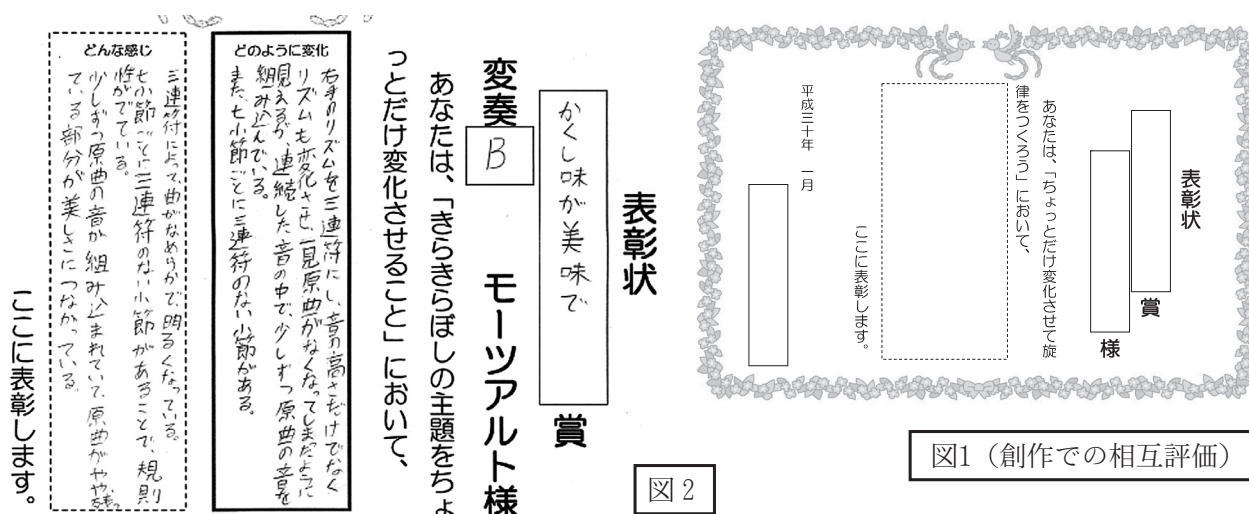


図1（創作での相互評価）

●タブレット型端末の活用から

自分の担当している変奏を何度も繰り返して聞く、他の変奏と聞き比べる、右手の楽譜を消して左手だけ聞いてみる等、タブレット型端末の特徴を活かして、自分なりの聴き方で表彰状の作成に取り組ん

でいた。主題と変奏1の左手がほとんど変化していないことに気付き、「主題の左手と、変奏1の右手を同時に再生すれば、変わっていないことが証明できるのではないか」と、動画機能を使って撮影するという活動を行った。これは、紙面の楽譜だけではできない聴き方であり、新しい鑑賞の形であったと言える。

第3時では、ピアニストの演奏を聴くことで、タブレット型端末（電子音）による演奏との比較聴取が自然とでき、演奏者による細かい間の取り方や、楽譜には記されていない強弱の変化など、「作曲者」の思考と切り離れたうえで、“演奏者ならではの”の工夫にも気付く事ができていた。

#### ●授業の様子から

創作と同じワークシート、教具を用いることで、「モーツァルトは音の高さとリズムをどのように変化させたのだろう」という思考にスムーズに入る事ができていた。また、「音の高さとリズムだけでは、この曲の雰囲気について説明できない」ことに気付き、強弱・調・和音・重なり・拍子と自然に音楽を形作っている要素の学習に入ることができた。さらに、「モーツァルトも、主題を16分音符に分割していた！」と自分と同じ考えで変奏していたことに親しみをもっていた。同時に、「どの要素を変化させたとしても、どこかにきらきら星の主題の様子が残っているからすごい」と、自分の経験に引きつけて聞くことができていた。

本題材では、楽譜から読み取り、音や音楽から聞き取った感じ方を仲間と伝え合う事により、どのように伝えたらよいかと試行錯誤しながら音楽的な価値観を広げたり深めたりすることができていた。すなわち、「自律」と「共栄」に向かう学びが実現できていたものと考えられる。

### Ⅲ 今次研究で見えてきたこと

今次研究の成果は、生徒自身が自分の学びや身につけた知識・技能を、次の学習へと生かそうとする態度が養われたという点である。3年生の最後の題材で、人形浄瑠璃のワークショップと「義経千本桜」の鑑賞を行った。オペラや歌舞伎といった舞台芸術と比較したり、箏や和太鼓の演奏体験との共通点や相違点を探したり、社会科（江戸時代の文化）や国語科（平家物語）の授業で学習した内容とつなげて考えたりと、これまでの様々な学習を活かしながら鑑賞する様子があった。学習を終えた生徒は人形浄瑠璃のよさを「三位一体の美しさ」「動きと音楽で人形に命を吹き込んでいること」「日本の芸術ならではの『間』や『所作』」であると語っており、我が国の音楽の“本質”にたどり着いていると言える。このように、教科で培った「見方・考え方」や、自分の得た活性化された知識を“道具”として持ち歩き、その先の学習に活かそうとする姿こそ、今次研究の成果であると考えられる。

この成果を今後活かすためには、中学校音楽科の枠にとらわれず、生徒個人が幼児期・小学校教育ではどのような学習を積み重ねてきたのかを理解し、高等学校以降の教育や生涯にわたる学習とのつながりを見通しながら生徒の学習の在り方を考えていく必要がある。「音楽を学ぶ」ことは、「多様な価値観を理解する力」を育み、「人間の思想力」「歴史を捉える力」を学び、「創造的な思考力」を高める可能性がある。「音楽を学ぶ」と「音楽で学ぶ」ことを大切にしながら、研究をすすめていきたい。

### Ⅳ 引用・参考文献

- 1 奈須正裕「資質・能力と学びのメカニズム」2017、p.170
  - 2 拙稿「タブレット型端末を活用した音楽創作の授業実践」北海道教育大学紀要（教育科学編）第65巻第1号、2014、pp.213-221
  - 3 同上
- ・菅野恵理子「ハーバード大学は「音楽」で人を育てる－21世紀の教養を創るアメリカのリベラル・アーツ教育」2015